

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 ～ 2010

課題番号：19510252

研究課題名 (和文) 島嶼国ツバルにおける環境破壊とそれに対する適応戦術に関する文化人類学的研究

研究課題名 (英文) Environmental Disruption and People's Tactics for Living in Tuvalu.

研究代表者

吉岡 政徳 (YOSHIOKA MASANORI)

神戸大学・大学院国際文化学研究所・教授

研究者番号：40128583

研究代表者の専門分野：社会人類学

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：島嶼、環境破壊、ツバル、適応、戦術

1. 研究計画の概要

太平洋にある総人口 1 万人程度の超ミニ国家・ツバルでは、海岸侵食が進み、地中から海水が噴出する水害に見舞われ、小さな島は海面下に水没するなどの現象が続いている。こうした自然環境の破壊は、グローバルな規模で起こっている環境破壊と連動していることは間違いなく、ツバルは、いわば自然破壊のグローバル化の波に飲まれているといえる。しかも、ツバルのような小さな国では、この自然破壊を契機として、もう一つの大きな問題が生まれている。それは、社会・文化環境の急速な変化である。それまで、世界にほとんど知られていなかったツバルが、この自然環境問題で世界的に有名になったことにより、世界中のマスコミ、NGO 団体、調査団、さらには観光客まで毎年押し寄せるようになったのである。そのため、ツバルの社会・文化環境は、急速に変貌を余儀なくされている。本研究の目的は、自然環境が破壊され、社会・文化環境も劇的な変貌を余儀なくされている太平洋の島嶼国・ツバルにおいて、人々が如何にして変化に適応しているかを探り、その適応のための戦術を明らかにすることである。そのため、ツバルでのフィールドワークを実施し、イギリスなどで文献調査を行う。

2. 研究の進捗状況

(1) 2007 年度と 2008 年度は、ツバルでのフィールドワークを中心とした研究を実施した。調査は首都フナフチにおいて行ったが、主として環境破壊に対する適応戦術についての聞き取り調査を行った。ツバルには、「伝統」を意味するファイファインガ(faifainga)という概念があるが、それは、過去から現在まで様々な変化を受けて変遷してきたツバルの「やり方」すべてを指す概念ともなっている。その概念に従えば、今日の「異邦人の大量流入」も「ツバル流」のやり方の中に含まれることになる。そうした概念の柔軟さからも理解できるように、人々は、直面する自然および社会環境の破壊による変化を、西洋世界・キリスト教世界と接触することで生み出された変化と同位置において、「変遷する伝統」という視点から、変化前と変化後を概念の変形によって対処をしてきていることが分かった。また、2008 年度は、ツバルからの帰路、ニュージーランドに立ち寄り、ツバルからの移民が多く暮らしているオークランド市西部のマセー(Messey)地区で調査を実施し、移住者の実態について情報を集めた。

(2) 2009 年度は、ニューヨークのコロンビア大学の図書館で、ツバル関連資料及び海面上昇などに関する資料を調査した。様々な文献調査を実施することが出来たが、特に、McQuarrie 著の Strategic Atolls: Tuvalu

and the Second World War.(1994)と Royal Society of London 編纂の The atoll of Funafuti (1904)を通して、フナフチにおける洪水被害が100年以上前から生じていることが確認できた。そして、近代化にともなうフナフチへの人口集中の結果、手付かずの浸水地帯に人間の生活圏が広がってきたことから「被害」が多発するようになったということが確認された。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

計画に従って実施したフィールド調査や文献調査によって、ツバルで生じている自然環境破壊の原因が、温暖化による海面上昇であるというよりも、グローバリゼーションによる社会環境の変化にあるということが分かった。また、ツバルの人々の変化に対する対処のあり方が「変遷する伝統」という捉え方によって生まれていることも分かった。植民地化以降のグローバルな流れに対して、ローカルの側は「伝統と近代」という二分法を掲げて対処する場合もあるが、ツバルの場合は、グローバルをローカルに取り込むことで「近代」も「伝統」であるという対処を行っている。これは、グローバルな波をなんとかローカルな枠で捉えなおそうとする「グローカリゼーション」を超えた反応であり、どんな変化もローカルな概念の中で生起していることであるとする、ローカル中心の独自の適応戦略であると言える。

4. 今後の研究の推進方策

自然・社会環境の破壊とグローバリゼーションの関連をさらに明確にすべく、計画に従って、植民地化に伴うグローバリゼーションと、最近のグローバリゼーションの質的な異質性、あるいは相同性を明確にすることで、「変遷する伝統」概念の肉付けを行ない、グローカリゼーションを超えたローカル中心の適応のあり方を探る。そのために、直轄植民地としてツバルを支配していた英国において、文献研究を行う。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 吉岡政徳 2010 「ツバルにおける環境破壊 (その2) 『会報ツバル』 35

- ② 吉岡政徳 2010 「比較主義者ニーダムの比較研究」出口顕、三尾編『人類学的比較再考』国立民族学博物館

- ③ 吉岡政徳 2009 「ツバルにおける環境破壊 (その1) 『会報ツバル』 34

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 1 件)

- ① 吉岡政徳 (監修、著) 2009 『オセアニア学』京都大学学術出版会